

保護者の関与と子どものスポーツ習慣形成に関する 事例研究

渡辺泰弘*
高橋季絵** 松本耕二*

抄録

スポーツに対してポジティブな意識をもつ保護者は、子どもの成長とともにトップスポーツへの大きな関心と期待を抱く。その一方で、保護者の大きな期待は子どもにとって大きなプレッシャーとしてのしかかかることが報告されている (Kanters, Bocarro, & Casper, 2008)。保護者は様々な理由によって子どもをスポーツにかかわらせている。子どものスポーツ習慣形成には通常、習いごとに関わる会費や用具費、送迎費用などの保護者の支出とそれにかかわる時間および労力を伴うとともに、保護者の関与が子どもたちのスポーツ参加におけるキーファクターであることが示唆されている (Coakley, 2006)。加えて、子どもの発育発達は保護者の育児戦略によって形づくられ、保護者が子どもたちをコントロールすることによりスポーツへの社会化およびスポーツによる社会化を促進させることが複数の研究によって明らかにされている (Green & Chalip, 1997)。すなわち、保護者と子どもの相互の合意がスポーツ習慣形成の重要な手段となりうる可能性が考えられる。保護者が子どものスポーツ参加に関する重要な意思決定者であることは明らかであり、今後は保護者の意識がどのように子どもたちの意識と相関するかについて確かめる必要もある。

本研究では、Green and Chalip (1997) の子どものスポーツ活動における家族の関与モデルを検証するとともに、新たな変数を加えることによって保護者の関与と子どものスポーツ習慣形成の因果関係を探ることを目的とした。調査は保護者と子どものそれぞれにおいて実施した (N=200)。収集されたデータは、Amos16.0を用いた共分散構造分析によって、CMIN/DF=1,737, CFI=.904, RMSEA=.061 (90% confidence interval=.053-.069), SRMR=.069 とモデルの妥当性が確認された。また、修正モデルを分析した結果、CMIN/DF=1,718, CFI=.880, RMSEA=.060 (90% confidence interval=.054-.066), SRMR=.061 とモデルの妥当性が確認された。

主な結果として、保護者のスポーツに対する意識が、子どもたちのスポーツに対する関心度合いを助長する手段となる可能性が示唆された。そして、子どもへの干渉や保護者からのプレッシャーが必ずしもネガティブな要因ではないことが示唆された。

キーワード：保護者の関与，子どもの関与，子どものスポーツ活動における家族の関与モデル

* 広島経済大学 〒731-0192 広島県広島市安佐南区祇園5丁目37-1

** 順天堂大学 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1

A Case Study on Parents Involvement and Sporting Habits for Children

Yasuhiro WATANABE*
Toshie TAKAHASHI** Koji MATSUMOTO*

Abstract

The number of children who are taking sports-related lessons and parents who are investing in their children's participation in sports is increasing due to the success of young athletes. The parents expect their children to become top players, and this is expressed through their consumption behaviors. On the other hand, it is reported that the more expectation of the protector bends over it as big pressure for a child (Kanters, Bocarro, & Casper, 2008). Parents enroll their children in sport for a variety of reasons. Several researchers have suggested that Parental commitment is a key factor in the sport participation of children because sporting habits usually depends on parental expenditures of money, time, and energy (Coakley, 2006). In addition, an emerging parental commitment that parents are solely responsible for controlling and socializing their children and that child development is shaped by parenting strategies (Green & Chalip, 1997). Thus, when assessing and valuing the sport program, parents and children do not operate from identical frames of reference should be focused when modelling the dynamics of parent-child relations in youth sport contexts.

The purpose of this study was to investigate and develop the family involvement with youth sport model (Green & Chalip, 1997) in youth soccer school. Parent and child pairs were surveyed (N=200). Questionnaire were taken of parents' and children's satisfaction with their soccer school, enduring involvement, children's perceived skill, parental expectations for children, parental encouragement of children, and parents' commitment to soccer school from past studies. Data were modeled, then tested and revised by means of Amos 16.0. The results of structural equation modeling (SEM) for the original model indicated an acceptable fit to the data: CMIN/DF=1,737, CFI=.904, RMSEA=.061 (90% confidence interval=.053-.069), SRMR=.069. The final model, which included this path, partial fit the data: CMIN/DF=1,718, CFI=.880, RMSEA=.060 (90%confidence interval=.054-.066), SRMR=.061.

One of the main results, parents with positive values about sport may combine with high expectations about their child's involvement. It was suggested that parental attitude toward sport is a step of the promotion of the interest in sports of children. And interference and the pressure on child by the parent were not necessarily negative factors.

Key Words : Parents- Children involvement, Family involvement with youth sport model

* Hiroshima University of Economics
5-37-1, Gion, Asaminami-ku, Hiroshima City, Hiroshima, Japan, 731-0192

** Juntendo University
1-1, Hiragagakuendai, Inzai City, Chiba, Japan, 276-1695

1. はじめに

子どものスポーツ習慣形成には保護者の関与が大きく影響するとともに、青年期におけるスポーツ活動継続にも大きく影響を及ぼす。子ども期のスポーツ活動に対して、そのサービスを購入する保護者の意向や、スポーツ少年団などで頻繁にみられるボランティアなどによる労働力の提供は、子どものスポーツ活動を維持・継続するために欠かせないものとなっている (Green & Chalip, 1998)。

スポーツに対してポジティブな意識をもつ保護者は、子どもの成長ともにトップスポーツへの大きな関心と期待を抱く。その一方で、保護者の大きな期待は子どもにとって大きなプレッシャーとしてのしかかることが報告されている (Kanters, Bocarro, & Casper, 2008)。すなわち、保護者と子どもの相互の合意がスポーツ習慣形成の重要な手段となりうる可能性が考えられる。保護者が子どものスポーツ参加に関する重要な意思決定者であることは明らかであり、今後は保護者の意識がどのように子どもたちの意識と相関するかについて確かめる必要がある。

図1は、Green and Chalip (1997) による「子どものスポーツ活動における家族の関与モデル」である。このモデルでは、子どものサッカースクールに対する保護者の満足感がサッカースクールへの関与とサッカーへの永続的な関与に影響を及ぼすと仮定している。そして、より大きな満足感がより強い組織への関与ならびにより強い永続的な関与を与えるとしている。保護者は、子どもたちのためにサッカースクールのサービスを購入しているという視点から、子どもたちが満足することによって、保護者も満足感を得るのではないかと予測している。

サッカースクールは保護者のサッカーへの社会化的場であるため、組織への関与はサッカースクールへの自尊心と子どもの能力を引き出す可能性がある。したがってこの関与モデルでは、組織へのコミットから保護者の永続的な関与、子どもへの期待に対する因果関係が仮定されている (Green & Chalip, 1997)。さらに、より高い保護者の期待が保護者のサッカーへの永続的な関与を生み、子どもへの励ましを誘発することを予想している。子どもが認識している技術と子どもの永続的な関与は、保護者の励ましによって影響を受け、子どもが認識している技術の度合いが高いと子ども自身の永続的な関与を促進し、サッカースクールへの満足度を高めることになると予測している。そして、サッカースクールへの満足感は、サッカーへの永続的な関与の度合いを促進することが予測されている。

このように、これまでの研究では感情的なサポー

トと保護者の望む模範的な親子関係が、子どもがスポーツを楽しむことやスポーツ活動の継続参加に関連があることを明らかにしている (Babkes & Weiss, 1999; Green & Chalip, 1997)。しかしながら、久崎・石山 (2012) が指摘するように、これまでの研究がスポーツ活動に関係する子どもや選手の心理的パターンや行動傾向にのみ焦点化されていることから、スポーツにおける保護者や指導者の影響に関する研究の取り組みが急務であることを指摘している。

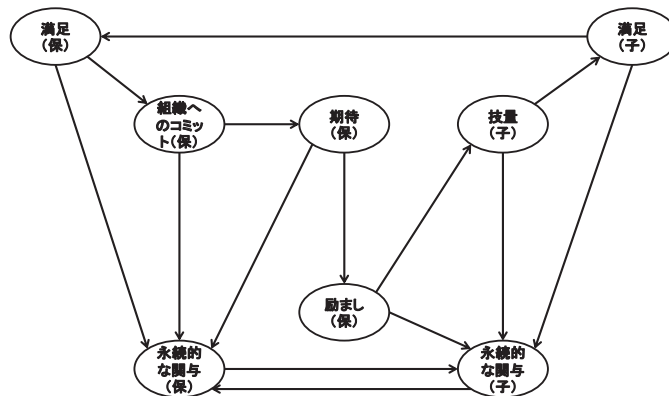


図1 子どものスポーツ活動における家族の関与モデル (原型)
(Green & Chalip, 1997)

2. 目的

第一生命保険株式会社が全国の幼児・児童 (保育園児・幼稚園児および小学校1年生から6年生) に実施した第27回「大人になったらなりたいたいもの」アンケート調査結果において、サッカー選手が6年連続で1位になるなど、子どものサッカー人気は留まることを知らない。本助成研究 (2014) では、日本で開催された海外のサッカークラブが開催するサッカーキャンプ参加者の保護者を対象に、保護者の教育観とスポーツに関する意識、世帯収入から、子どものスポーツ習慣形成に関する保護者の影響を明らかにしてきた。本年度は、保護者と子どもの相互の合意がスポーツ習慣形成の重要な予測手段となりうる可能性が考えられるという先行研究の知見から、Green and Chalip (1997) の因果関係モデルを検証するとともに、新たな変数を加えることによって、保護者の関与と子どものスポーツ習慣形成の因果関係を探ることを目的とした。

3. 研究方法

3.1 調査対象

調査は子どもとその保護者を対象に実施した。調査対象クラブは、地方都市にあるサッカークラブであり、サッカーチームおよび同チームを核とした総合スポーツクラブである。サッカーのトップチームはJリーグ百年構想クラブの認定を受けている。

3.2 調査方法

調査方法は、サッカースクール実施日に、スクールスタッフより質問紙を子どもが受け取り、子どもが帰宅後に保護者へ手渡し、子どもと保護者がそれぞれの質問項目に回答し、後日、子どもまたは保護者がスクールへ持参をする回収方法をとった。返信期間は質問紙の配布後2週間に設定した(2016年1月17日~1月31日)。期限内に返信のあった質問紙は204部(配布枚数は400部:回収率51%)であり、そのうち、回答の不備が多くみられた質問紙を除いた200部を有効回答として分析を進めた。

3.2.1 保護者

子どもと同様に200名の内、161名が母親による回答(80.5%)であり、父親の回答は37名(18.5%)、その他が2名(1%)であった。これまでの先行研究では保護者による回答は母親が多いことが明らかとなっており(e.g., Howard & Madrigal, 1990; Green & Chalip, 1997; Babkes & Weiss, 1999)、本研究においても同様となった。父親の年齢は30歳から55歳であり平均年齢は42.7歳、母親の年齢は30歳から52歳であり平均年齢41.5歳であった。世帯収入について、600万円未満が28.8%、600万円から800万円未満が40.6%、800万円以上が30.6%であり、平均世帯収入は6,926,470円であった。厚生労働省が発表した国民生活基礎調査の概況(2014)によると、世帯平均年収は537万円、中央値が432万円となっている。世帯主の年齢別にみた所得金額では、30代が545万1000円、40代が648万9000円であり、児童がいる世帯では673万2000円の世帯平均年収となっている。また、第2回学校外教育活動に関する調査報告書(2013)によると、第1子が中学1年生の時点で600万円未満の世帯と600万円以上の世帯がほぼ半数の割合という報告もある。これらを鑑みると、1世帯当たり平均所得が減少する中で、サッカースクール参加者は高所得層の部類に入ることが推察される。

また、本サンプルにおける親のサッカー経験の有無について父親の40.6%が、母親の5.7%がそれぞれ運動部活動、またはクラブチームなどでのサッカー経験があると回答した。

3.2.2 子ども

サンプルの属性は、200名の子どもの内、191名が男子、9名が女子、年齢の範囲は9歳から15歳の子どもで構成され、平均年齢は12歳であった。

サッカーを始めた年齢は、2歳から10歳であり、平均開始年齢は5.6歳であった。サッカーを始めたきっかけは、「友達の影響」が最も多く27.0%、次

いで「父親」が20.0%、「テレビ」が13.5%であった。また、使用しているサッカーシューズのブランドを調査すると、最も多かったブランドがアディダスで全体の31.2%、次いでナイキが28.0%、ミズノが17.0%、プーマが12.4%であった。7.8%の子どもが複数のブランドのシューズを保持していた。

3.3 調査項目

調査項目は上記のように、保護者の個人的属性には性別、年齢、世帯収入、サッカー経験の有無などの項目を、子どもの個人的属性には、性別、年齢、サッカーを始めたきっかけ、使用しているサッカーシューズのブランドなどを質問した。そして、保護者と子どもの意識については主にGreen and Chalip(1997)の項目を援用、改編し使用した。その際、先行研究で用いられた項目に加え、現場のサッカー指導者、サッカースクールに子どもを通わせた経験のある保護者へのパイロット調査により、オリジナル項目からの項目の増減、ワーディングの修正を行っている。

保護者の項目では、「子どもへの期待」には「子どもはどのくらいサッカーが上手だと思いますか」、「あなたの保護者は、あなたのプレーの上達(技術)をどのくらいほめてくれますか」などの5項目を用いた。「サッカーへの関与」には「あなた自身、サッカーは好きですか」、「あなた自身、サッカーについてどの程度の関心がありますか」の2項目を用いた。「子どもへの励まし」には、「子どもの練習や試合は見に行きますか」、「子どもとサッカーの話をいつもしますか」、「子どものサッカーのことをいつも考えていますか」の3項目を用いた。「組織へのコミット」には「数あるスクール事業の中で、子どもをこのクラブに参加させて良かった」、「親族・友人・知人にこのクラブのことを話したい」など5項目を用いた(e.g., Green & Chalip, 1998)。「スクールへの満足」には「会場の設備(グラウンドなど)」、「指導者の質(指導、知識、子どもへの対応など)」など4項目を用いた(e.g., Green & Chalip, 1998)。これら変数に、先行研究(Scanlan & Lewthwaite, 1984; Zeijl, Te Poel, Du Bois-Reymond, Ravesloot, & Meulman, 2000; Kanetrs et al., 2008)を参考に「子どもの試合の結果は必ず聞きますか」、「試合があるときは子どもに試合で勝つよう言葉をかけていますか」、「子どものプレーについてよく意見をしますか」の3項目からなる「子どもへの干渉」を新たに加えた。

子どもの項目では、「子どもが認識している技量」には「あなたはサッカーがどのくらい上手ですか」、「あなたの保護者は、あなたのプレーの上達(技

術)をどのくらいほめてくれますか」などの4項目を用いた。「スクールの満足度」には「監督やコーチたちは気さく(親しみやすい)ですか」、「監督やコーチたちの指導は素晴らしいですか」、「監督やコーチたちのサッカーに関する知識は豊富ですか」の3項目を用いた。「サッカーへの関与」には「サッカーをすることは楽しいですか」、「いつもサッカーのことを考えていたいですか」、「サッカーに関することはどんなことでも関心がありますか」の3項目を用いた。「スクール継続」には「このスクールで楽しいひと時を過ごしたいですか」、「可能な限りこのスクールでずっとプレーしたいですか」など4項目

を用いた。これら項目に加え、保護者の項目と同様に「あなたは試合で勝つことにこだわりますか」、「あなたの保護者から試合はいつも勝つように言われますか」、「あなたの保護者から自分のプレーについていつも意見を言われますか」の3項目からなる「保護者からのプレッシャー」を新たに加えた。尺度は段階評定尺度を用い、「とても上手(6)ーまったく上手でない(1)」、「いつもほめてくれる(6)ーまったくほめてくれない(1)」というように、それぞれの項目の語尾に即すような形で回答された(表1)。

表1 確認的因子分析の結果(保護者, 子ども)

保護者						子ども					
Factors	Items	λ	α	CR	AVE	Factors	Items	λ	α	CR	AVE
期待	子どもはどのくらいサッカーが上手だと思いますか	.44	.67	.76	.41	認識している 技量	あなたはサッカーがどのくらい上手ですか	.72	.71	.75	.45
	子どものプレーの上達(技術)をどの程度ほめていますか	.55					あなたの観は、あなたのプレーの上達(技術)をどのくらいほめてくれますか	.71			
	子どものスポーツ(サッカー)活動をいつも応援していますか	.80					あなたの観は、あなたのサッカーをいつも応援してくれていると思いますか	.59			
	子どもにプロ選手を目指してほしい	.41					監督やコーチたちはあなたのプレーの上達(技術)をどのくらいほめてくれますか	.49			
	子どもにはスクールで楽しいひと時を過ごしてほしい	.57					監督やコーチたちは気さく(親しみやすい)ですか	.65			
サッカーへの 関与	あなた自身、サッカーは好きですか	.96	.93	.93	.87	スクールの 満足度	監督やコーチたちの指導は素晴らしいですか	.79	.76	.83	.52
	あなた自身、サッカーについての程度の関心がありますか	.92					監督やコーチたちのサッカーに関する知識は豊富ですか	.70			
励まし	子どもの練習や試合は見に行きますか	.61	.82	.92	.80	サッカーへの 関与	サッカーをすることは楽しいですか	.68	.81	.84	.65
	子どもとサッカーの話はいつもしますか	.89					いつもサッカーのことを考えていたいですか	.83			
	子どものサッカーのことをいつも考えていますか	.86					サッカーに関することはどんなことでも関心がありますか	.80			
干渉	子どもの試合の結果は必ず聞きますか	.72	.78	.82	.60	プレッシャー	あなたは試合で勝つことにこだわりますか	.65	.69	.71	.46
	試合があるときは子どもに試合で勝つよう言葉をかけていますか	.71					あなたの観から試合はいつも勝つように言われますか	.66			
	子どものプレーについてよく意見をしますか	.59					あなたの観から自分のプレーについていつも意見を言われますか	.66			
組織への コミット	子どもには可能な限りこのスクールにずっと通わせたい	.84	.89	.89	.63	スクール 継続	このスクールで楽しいひと時を過ごしたいですか	.71	.81	.92	.74
	可能な限りこのスクールのことをもっと知りたい	.76					可能な限りこのスクールでずっとプレーしたいですか	.81			
	数あるスクール事業の中で、子どもをこのクラブに参加させて良かった	.89					可能な限りこのスクールのことをもっと知りたいですか	.78			
	親族・友人・知人にこのクラブのことを話したい	.77					誰かにこのスクールのことを自慢したいですか	.63			
	自身が想定していた内容とスクールのサービス内容が合致している	.63									
スクールへの 満足	スクールに関する情報提供(ホームページ、会報など)	.70	.74	.92	.76						
	スクールの全体的な質	.96									
	会場の設備(グラウンドなど)	.63									
	指導者の質(指導、知識、子どもへの対応など)	.72									

λ : 因子負荷量 α : クロンバック CR: 合成信頼度 AVE: 平均分散抽出度

3.4 分析方法

主な分析方法は、統計パッケージ SPSS16.0 を用いて各項目の単純集計およびクロス集計、Amos16.0 を用いて確認的因子分析および共分散構造分析を試みた。なお、尺度の信頼性の検証にはクロンバック α 係数と合成信頼度(CR)を用い、尺度および構造モデルの妥当性には NC (Normed Chi-squared), CFI (Comparative Fit Index), SRMR (Standardized Root Mean Square Residual), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。

確認的因子分析を行った結果、保護者の尺度ではそれぞれ、「期待(5項目: λ =.41-.80, α =.67, CR=.76, AVE=.41)」、「サッカーへの関与(2項目: λ =.92-.96, α =.93, CR=.93, AVE=.87)」、「励まし(3項

目: λ =.61-.89, α =.82, CR=.92, AVE=.80)」、「干渉(3項目: λ =.59-.72, α =.78, CR=.82, AVE=.60)」、「組織へのコミット(5項目: λ =.63-.89, α =.89, CR=.89, AVE=.63)」、「スクールへの満足(4項目: λ =.63-.96, α =.74, CR=.92, AVE=.76)」の値を示した(CMIN/DF=2.054, CFI=.907, RMSEA=.073 (90% confidence interval=.062-.083, SRMR=.062))。

子どもの尺度では、「認識している技量(4項目: λ =.49-.72, α =.71, CR=.75, AVE=.45)」、「スクールの満足度(3項目: λ =.65-.79, α =.76, CR=.83, AVE=.52)」、「サッカーへの関与(3項目: λ =.68-.83, α =.81, CR=.84, AVE=.65)」、「圧力(3項目: λ =.65-.66, α =.69, CR=.71, AVE=.46)」、「スクール継続(4項目: λ =.63-.81, α =.81, CR=.92, AVE=.74)」の値

をそれぞれ示した (CMIN/DF=2.096, CFI=.909, RMSEA =.074 (90% confidence interval=.061-.081, SRMR=.063). 保護者, 子どもの尺度それぞれにおいて, 信頼性および妥当性の基準を満たさない因子もみられた (α = .70, CR = .70, NC < 3.0, CFI \geq .90, SRMR < .10, RMSEA < .10, AVE \geq .50) (Fornell and Larcker, 1981; Nunnally and Bernstein, 1994; Kline, 2005). しかし, 項目の削除等による信頼性, 妥当性の向上を主とすると, 測定したい項目を測定できなくなるなどの問題も発生するとともに, 著しく尺度の信頼性と妥当性を損なうものではないと判断し, そのまま尺度を用いることとした。

4. 結果及び考察

4.1 保護者と子どもの意識の違い

Babkes and Weiss (1999) は 9 歳から 11 歳の子どものサッカー競技の能力に対する保護者の評価と子ども自身の評価, さらにその保護者の評価に対する子どもの知覚との関係を検討している。その結果, 自分自身の競技能力に対する保護者の評価を肯定的に知覚している子どもほど競技能力に対する自己評価も高いことを明らかにした。しかし, 保護者による評価そのものは子どもの自己評価とは関係がなく, 保護者の信念や評価に対する子どもの解釈が重要であることが示唆されている。そこで, 保護者と子どもそれぞれの項目より 10 項目を選択し, 保護者と子どもの意識の違いを比較した (表 2)。

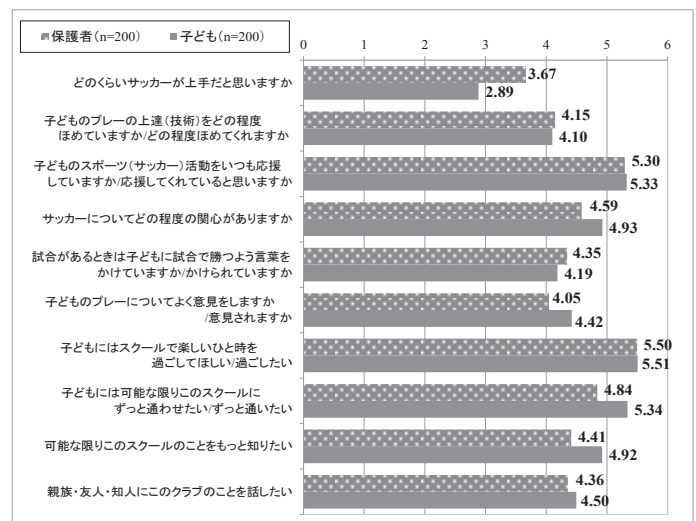
保護者の意識が子どもより高かった項目は, 「どのくらいサッカーが上手だと思いますか (3.67)」、「子どものプレーの上達 (技術) をどの程度ほめていきますか/どの程度ほめてくれますか (4.15)」、「試合があるときは子どもに試合で勝つよう言葉をかけていますか/かけられていますか (4.35)」の 3 項目であり, その他の項目においては子どもの得点の方が高い傾向がみられた。

特徴的な結果として, サッカーの技術については子どもが認識しているよりも保護者の方が肯定的にとらえている。子どものスポーツ参加に対して, 指導, 用具の購入, 送迎などの援助を行うリスクを冒しながらも子どもに関与および期待をする保護者の意識の表れともいえる (Babkes & Weiss, 1999; Dukes & Coakley, 2002)。その一方で, 「子どものプレーについてよく意見をしますか/意見されますか」においては子どもの得点が高い傾向がみられた

(4.42)。この傾向は, 「勝つことに対して意見をすること」が子どもの得点よりも高いことからわかるように, 保護者の関与や期待からきている可能性もある。例えば, 保護者の関与や期待から子どもに意見をすることは, 保護者にとって肯定的にとらえ

ている傾向があり, 様々なサポートをすることが子どものスポーツ環境を整えることになる。一方で子どもにとってはそれがかえって, 保護者からのプレッシャーとして感じるようになり, プレッシャーを感じた子どもたちは, 競争の不安とスポーツ活動による燃え尽きを経験し, スポーツからの離脱を招く可能性が高いことが報告されている (Coakley, 1992)。一概には言えないが, その傾向が保護者と子どもの意識の差からうかがえる結果となった。これは, Kanters et al., (2008) の結果と類似するものである。

表 2 保護者と子どもの意識の違い



4.2 子どものスポーツ活動における家族の関与モデルの検証

子どものスポーツ活動における家族の関与モデルの因果関係を共分散構造分析によって検証した。その結果, CMIN/DF=1,737, CFI=.904, RMSEA=.061 (90% confidence interval=.053-.069), SRMR=.069 とモデルの妥当性が確認された。それぞれの要因がどのような因果関係があるかを検証した結果, 「保護者の満足」が「保護者の組織へのコミット」に影響し (満足→コミット: β = .72, p < .001), 組織へのコミットは「保護者の期待」と「保護者の永続的な関与」に影響することが明らかとなった (コミット→関与: β = .25, p < .001, コミット→期待: β = .44, p < .001)。そして, 保護者の永続的な関与は「保護者による子どもへの励まし」に, 保護者の期待は「保護者の永続的な関与」と「子どもへの励まし」にそれぞれ影響することが明らかとなった (関与 (保) →励まし: β = .26, p < .01, 期待→関与 (保): β = .53, p < .001, 期待→励まし: β = .64, p < .001)。

さらに, 保護者による子どもへの励ましは「子どもが認識している技量」に, 子どもが認識している技量は「子どもの永続的な関与」と「子どものスクール満足」に, 子どものスクール満足は「子どもの

永続的な関与」と「保護者の満足」にそれぞれ影響することが明らかとなった(励まし→技量: $\beta=.46$, $p<.001$, 技量→関与(子): $\beta=.49$, $p<.001$, 技量→満足: $\beta=.60$, $p<.001$, 満足(子)→満足(保): $\beta=.23$, $p<.01$, 満足(子)→関与(子): $\beta=.30$, $p<.01$) (図2).

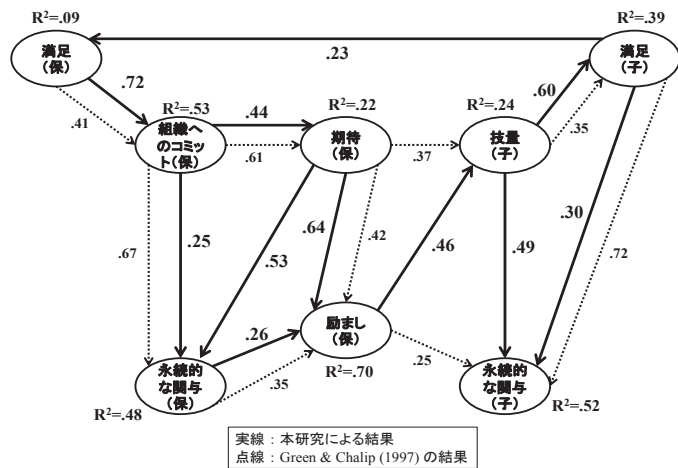


図2 子どものスポーツ活動における家族の関与モデルの検証

これら結果は、Green and Chalip (1997) とほぼ同様の結果を示しているものの、「期待→関与(保)」、「励まし→技量」、「技量→関与(子)」、「満足(子)→満足(保)」は、本研究のみで影響を及ぼす結果であった。また、「期待→技量」と「励まし→関与(子)」は先行研究のみで影響を及ぼす結果であった。

4.3 子どものスポーツ活動における家族の関与モデルの修正

子どものスポーツ活動における家族の関与モデルに、新たに設定した3変数(子どもへの干渉、保護者からのプレッシャー、子どものスクール継続)を加え、それぞれの因果関係を共分散構造分析によって検証した。その結果、CMIN/DF=1,718, CFI=.880, RMSEA=.060 (90%confidence interval=.054-.066), SRMR=.061 と CFI が本研究で設定した基準値を満たさなかったものの、他の基準値は十分に満たされていたため、モデルの妥当性に問題はないと判断した。それぞれの要因がどのような因果関係があるかを検証した結果、図2とほぼ同様の因果関係であったものの、「子どもへの励まし」から「子どもが認識している技量」への影響は見られなかった。

新たに加えた変数では、「子どもへの干渉」は、「子どもへの励まし」から影響を受けるとともに(励まし→干渉: $\beta=.63$, $p<.001$)、「保護者の期待」、「保護者からのプレッシャー」、「子どものスクール満足」、「子どものスクール継続」へ影響を及ぼす結果

となった(干渉→期待: $\beta=.37$, $p<.01$, 干渉→プレッシャー: $\beta=.37$, $p<.05$, 干渉→満足: $\beta=-.21$, $p<.05$, 干渉→継続: $\beta=.28$, $p<.05$)。「保護者からのプレッシャー」では、「子どもへの期待」、「保護者の励まし」、「子どもへの干渉」から影響を受けるとともに、「認識している技量」へ影響を及ぼした(期待→プレッシャー: $\beta=-.52$, $p<.01$, 励まし→プレッシャー: $\beta=.70$, $p<.01$, 干渉→プレッシャー: $\beta=.37$, $p<.05$, プレッシャー→技量: $\beta=.57$, $p<.001$)。さらに、「子どものスクール継続」では、「組織へのコミット」、「子どものスクール満足」、「子どもの永続的な関与」から影響を受ける結果となった(コミット→継続: $\beta=.25$, $p<.001$, 干渉→継続: $\beta=.28$, $p<.05$, 励まし→継続: $\beta=-.35$, $p<.01$, 満足→継続: $\beta=.42$, $p<.001$, 関与→継続: $\beta=.43$, $p<.001$) (図3)。これら結果について以後解説をする。

保護者がスクールに対して満足することがスクールへのコミットにつながり、サッカーへの永続的な関与および子どものスクール継続にも影響している。子どものスポーツ習慣形成には、習い事に関わる会費や用具費、送迎費用などの保護者の支出とそれにかかわる時間および労力を伴うとともに、保護者の関与やコミットが子どもたちのスポーツ参加におけるキーファクターであることを示唆する結果といえる (Coakley, 2006; Thibaut, Vos, & Scheerder, 2014)。また、複数の特徴的な結果のひとつである「子どもへの干渉」について、過干渉は子どものスクール満足に負の影響を示した。その一方で、子どもへの干渉が子どもにとってポジティブなプレッシャーとなっていることも示された。そして、子どもへの干渉が期待の裏返しでもあることがうかがえるものの、過度な期待は、ネガティブな影響を子どもに及ぼす可能性も示唆された。また、「子どもへの励まし」は、保護者からのプレッシャーをポジティブにとらえ、子どもの技量にも良い影響を及ぼす可能性が示唆された。しかしながら、子どもへの過度な励ましは子どものスクール継続にネガティブな影響も及ぼすことが明らかとなった。

スポーツ活動に肯定的な価値観をもつ保護者は、子どもとの関係について高い期待を示す傾向がある。しかし、その傾向が一定時期まではポジティブな方向に影響を及ぼすものの、ある時期から保護者の期待や励ましが子どもにとってストレスとなり、保護者の意向と子どもの意向にギャップが生じることが報告されている (Green & Chalip, 1997; Babkes & Weiss, 1999; 武田・中込, 2003; Knight, Boden, & Holt, 2010)。本研究においても先行研究とほぼ同様の知見を得ることができた。

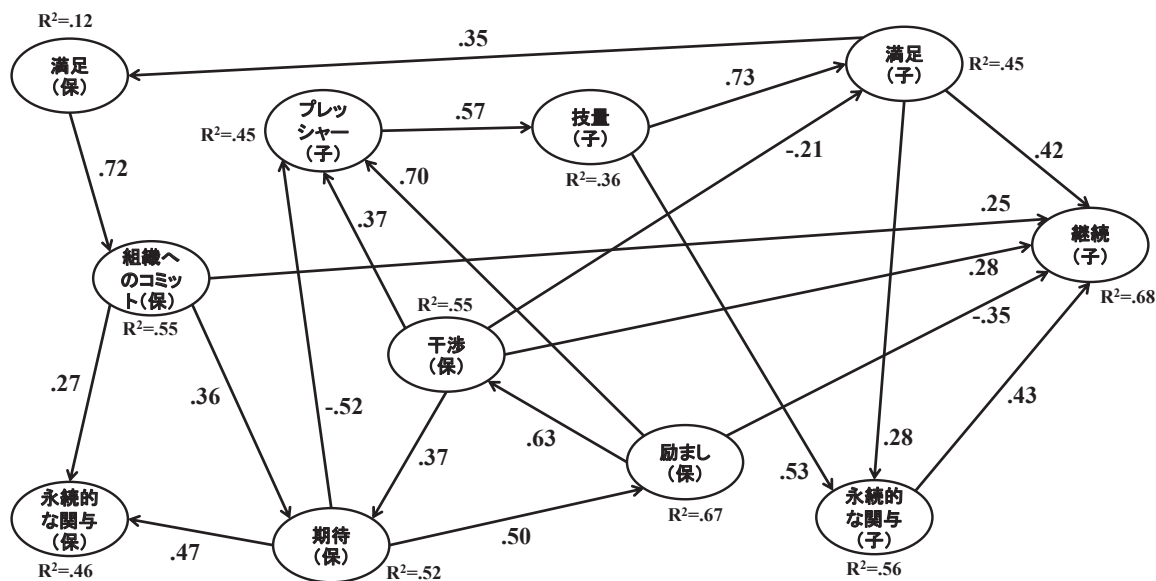


図3 子どものスポーツ活動における家族の関与モデル (修正)

4.4 プロ選手を目指すことへの期待

子どものスポーツ習慣形成には通常、習い事に関わる会費や用具費、送迎費用などの保護者の支出とそれにかかわる時間および労力を伴うとともに、保護者の関与が子どもたちのスポーツ参加におけるキーファクターであることが示唆されている

(Coakley, 2006). 特に、世帯収入と子どもの習い事との関係性が指摘されており、年収の高い保護者の子どもほど定期的に運動をしていることや、スポーツにかかる費用の負担は重くのしかかる傾向が指摘されている (佐藤, 2009). そこで、過去の助成研究 (2014) と同様に、保護者の子どもがプロ選手を目指すことへの期待に加えて、子ども自身がそれを望んでいるかどうかを世帯収入別に明らかにした。

保護者の意識をみると、600万円未満では「わからない」が34.7%と最も多く、次いで「できれば目指してほしい」が26.5%であった。600万円以上800万円未満では「できれば目指してほしい」が29.0%と最も多く、次いで「わからない」が27.5%であった。800万円以上では「できれば目指してほしい」が36.5%と最も多く、次いで「わからない」が21.2%であった。

子どもの意識をみると、600万円未満では「絶対になりたい」が49.0%と最も多く、次いで「できればなりたいたい」が20.4%であった。600万円以上800万円未満では「絶対になりたい」が36.2%と最も多く、次いで「なりたいたい」が33.3%であった。800万円以上では「絶対になりたい」が42.3%と最も多く、次いで「なりたいたい」が28.8%であった。これらの結果を概観すると、多くの保護者は、少なからず子

どもにプロ選手を目指してほしいという期待が大いにかがえる。しかしながら、「できれば目指してほしい」、「わからない」という保護者の意識に反して、子どもは「絶対になりたい」というプロ選手への憧れをうかがうことができ、親子間の意識の比較から、先のことは子ども次第という意識の表れという保護者の意向も明らかとなった (表3)。

表3 プロ選手を目指すことへの期待

保護者 (n=170)	プロ選手を目指すことへの期待 世帯収入別)							
	600万円未満		800万円未満		800万円以上		合計	
	%	(n)	%	(n)	%	(n)	%	(n)
ぜひ目指してほしい	14.3%	(7)	18.8%	(13)	15.4%	(8)	16.5%	(28)
目指してほしい	14.3%	(7)	7.2%	(5)	11.5%	(6)	10.6%	(18)
できれば目指してほしい	26.5%	(13)	29.0%	(20)	36.5%	(19)	30.6%	(52)
できれば目指してほしくない	4.1%	(2)	11.6%	(8)	11.5%	(6)	9.4%	(16)
目指してほしくない	4.1%	(2)	5.8%	(4)	1.9%	(1)	4.1%	(7)
絶対目指してほしくない	2.0%	(1)	.0%	(0)	1.9%	(1)	1.2%	(2)
わからない	34.7%	(17)	27.5%	(19)	21.2%	(11)	27.6%	(47)
合計	100%	(49)	100%	(69)	100%	(52)	100%	(170)
子ども (n=170)	プロ選手になりたいか 世帯収入別)							
	600万円未満		800万円未満		800万円以上		合計	
	%	(n)	%	(n)	%	(n)	%	(n)
絶対なりたいたい	49.0%	(24)	36.2%	(25)	42.3%	(22)	41.8%	(71)
なりたいたい	18.4%	(9)	33.3%	(23)	28.8%	(15)	27.6%	(47)
できればなりたいたい	20.4%	(10)	21.7%	(15)	13.5%	(7)	18.8%	(32)
なるべくなりたいたくない	2.0%	(1)	1.4%	(1)	1.9%	(1)	1.8%	(3)
なりたいたくない	4.1%	(2)	1.4%	(1)	1.9%	(1)	2.4%	(4)
わからない	6.1%	(3)	5.8%	(4)	11.5%	(6)	7.6%	(13)
合計	100%	(49)	100%	(69)	100%	(52)	100%	(170)

5. まとめ

本研究では、Green and Chalip (1997) のモデルを検証するとともに、新たな変数を加えることによって、保護者の関与と子どものスポーツ習慣形成の因果関係を探ることを目的としてきた。結論として、モデルの検証、新たな変数を加えることによる修正

モデルともに、それぞれの要因が保護者と子どものスポーツ活動に対する重要な予測要因であることが確認された。モデルの検証では、先行研究とほぼ同様の結果を示したものの、本研究のみで影響を及ぼす結果もみられた。修正モデルでは、保護者のスポーツに対する意識が、子どもたちのスポーツに対する関心度合いを助長する手段となる可能性が示唆された。そして、子どもへの干渉や保護者からのプレッシャーが必ずしもネガティブな要因ではないことが示唆された。

子どものスポーツ習慣形成について、保護者によって示される組織へのコミットや子どもへの期待は、子どもへのポジティブなプレッシャーを生むとともに、子どもが保護者の期待に応えようとする意識を植え付けさせる。そして、子どものサッカーへの永続的関与やスクールへの満足を高め、スクール活動の継続に導く可能性がある。本研究の対象となったサッカースクールをはじめ、子どもが参加するスポーツ組織は保護者にとってスポーツへの社会化の現場となりうる。スポーツ組織において、保護者と子どもの意識の経路を理解できるならば、保護者または子ども、両方においてスポーツ習慣を形成する戦略を立てることが可能になるのではなかろうか。

参考文献

- Babkes, M. L., & Weiss, M. R. (1999). Parental influence on children's cognitive and affective responses to competitive soccer participation. *Pediatric Exercise Science*, 11, 44-62.
- Coakley, J. (1992). Burnout among adolescent athletes: A personal failure or social problem. *Sociology of sport journal*, 9(3), 271-285.
- Coakley, J. (2006). The good father: Parental expectations and youth sports. *Leisure studies*, 25(2), 153-163.
- 第一生命保険株式会社 News Release. 第 27 回「大人になったらなりたいもの」アンケート調査結果, 2016 年 1 月 7 日.
- Dukes, R. L. & Coakley, J. (2002). Parental commitment to competitive swimming. *Free inquiry in creative sociology*, 30(2), 185-198.
- Fornell, C., & Larcker, D. F. (1981). Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error. *Journal of Marketing Research*, 18, 39-50.
- Green, B. C., & Chalip, L. (1997). Enduring involvement in youth soccer: The socialization of parent and child. *Journal of leisure research*, 29(1), 61-77..
- Green, B. C., & Chalip, L. (1998). Antecedents and consequences of parental purchase decision involvement in youth sport. *Leisure Sciences*, 20(2), 95-109.
- 久崎孝浩・石山貴章. (2012). スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響: その研究動向と今後の方向性. *応用障害心理学研究*, (11), 45-67.
- Holt, N. L., Kingsley, B. C., Tink, L. N., & Scherer, J. (2011). Benefits and challenges associated with sport participation by children and parents from low-income families. *Psychology of sport and exercise*, 12(5), 490-499.
- Howard, D. R., & Madrigal, R. (1990). Who makes the decision: The parent or the child? The perceived influence of parents and children on the purchase of recreation services. *Journal of leisure research*, 22(3), 244-258.
- Kanters, M. A., Bocarro, J., & Casper, J. M. (2008). Supported or pressured? An examination of agreement among parents and children on parent's role in youth sports. *Journal of Sport Behavior*, 31, 64-80.
- Kantomaa, M. T., Tammelin, T. H., Näyhä, S., & Taanila, A. M. (2007). Adolescents' physical activity in relation to family income and parents' education. *Preventive medicine*, 44(5), 410-415.
- Kline, R. B. (2005). *Principles and practice of structural equation modeling* (2nd ed.). New York: Guilford Press.
- Knight, C. J., Boden, C. M., & Holt, N. L. (2010). Junior tennis players' preferences for parental behaviors. *Journal of applied sport psychology*, 22(4), 377-391.
- Nunnally, J. C., & Bernstein, I. H. (1994). *Psychometric theory* (3rd ed.). New York, NY: McGraw-Hill.
- 佐藤暢子 (2009). 子どもの「運動格差」を生じさせるものは何か? 第1回学校外教育活動に関する調査. *ベネッセ教育総合研究所*, 1-6.
- Scanlan, T. K., & Lewthwaite, R. (1984). Social psychological aspects of competition for male youth sport participants: I. Predictors of competitive stress. *Journal of sport psychology*, 6(2), 208-226.
- 武田大輔・中込四郎. (2003). 子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子どもの認知・情動的態度との関係: ジュニアサッカー選手を対象として. *体育学研究*, 48(4), 421-438.
- Thibaut, E., Vos, S., & Scheerder, J. (2014). Hurdles for sports consumption? The determining factors of household sports expenditures. *Sport Management Review*, 17(4), 444-454.

渡辺泰弘・松本耕二・高橋季絵. (2014). 児童のスポーツ習慣形成に関する親の影響. SSF スポーツ政策研究, 3(1), 335-342.

Zeijl, E., te Poel, Y., du Bois-Reymond, M., Ravesloot, J., and Meulman, J. (2000). The role of parents and peers in the leisure activities of young adolescents. Journal of Leisure Research. 32, 281-302.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです

